

多摩の企業人  
『私の決断』  
Vol.47

株式会社 吉本製作所

代表取締役社長

よしもと まこと  
**吉本 誠氏**

1970年青梅市生まれ。青梅市に本社・工場、ベトナム・ホーチミン市に2016年4月に法人化した「吉本ベトナム」を持つ。2カ月に1回1週間ほどベトナムに足を運んでいる。社員25人。青梅市今井3-9-17 TEL:0428-32-0177  
<http://www.yoshimoto-fc.co.jp>

ベトナム進出で大いなる飛躍  
海外ネットワークが実を結ぶ

**吉** 本製作所は半導体、医療機器、検査機器、液晶関連、自動車関連などの機械部品加工を中心に設計から組立まで加工全般を行う。鉄、アルミ、ステンレスなど素材を問わず、ミリ単位のものから2m大のものまで加工ができるのが特長だ。

先代吉本功氏が1972年に青梅市で創業。2代目の吉本誠社長は、会計ソフト開発会社出身。大学卒業後、視野を広げるため、あえて異業種を選んだ。カスタマーサポート部門で、中小企業の経営者や多数出合い、事業の面白さ、大変さ、醍醐味などを学んだことが後に大いに役立つことになる。

98年28歳で吉本製作所に入社。製造部門を4年経験し、自社の持つ技術の高さを知った。同時に技術や知識の共有化、熟練職人の承継の仕組みづくりの必要性を感じ、32歳で未来に向けた社内改革の「キックオフ宣言」を行う。社内の暗黙のルールの明文化や共有化を進め、さらに環境マネジメントシステムのISO14001を、続けて品質管理であるISO9001を取得する。当初は改革をシステマ的に進めてしまったことから、社内の反発も受けたが、少しずつ理解が広がり、35歳で社長に就任。社内の技術やノウハウ、設備を活用して自社製品の開発に乗り出す。OEMで携わっていたポンプに自分たちのアイデアを加え、オリジナルの多筒式ドライ真空ポンプと液送プランジャーポンプを作り出した。2006年には「多連ベローズ送液ポンプの開発」で、第4回多摩ブルー・グリーン賞の多摩ブルー賞優秀賞を受賞した。

転機はたましんのベトナム視察

業績が伸び始めたところをリーマンショックが襲う。続けて東日本大震災が起これる。売上は3割にまで落ち込み、存続も危ぶまれる状況に。そんな時に舞い込んだのが

ベトナム法人社屋前。2016年に社員旅行で行った際に両国の社員で記念撮影

国内工場には、松浦機械の「同時5軸MC MX-520」、森な精機の「ecoMill 1100V」など最新の工作機械がそろ

多摩信用金庫の「ベトナム視察」だった。今後の事業を模索するため、自身でも東南アジアに出かけていたが、視察で訪れたベトナムの国の成長度、規模感、フィードバックが合い、転機となった。何度か通う中、現地経営者と親しくなり、13年に現地委託生産を開始し、14年には現地事務所を開設した。さらに、工業団地に入居せず、街中に委託生産の会社を16年に設置した。この工場は建設せず、現地ベトナム人の工場設備や技術に合わせて、仕事を依頼するビジネスモデルを採用したことが明暗を分けた。

現地で100社を超える工場を見て回り、その中の4社と取引を開始。厳選した工場へ得意分野に合わせた加工を依頼することで、日本と変わらない高品質を実現した。さらに、クレームは吉本製作所が対応し、場合によっては青梅工場で修正を行った。現地企業にとっては、たとえ不具合を出しても全て返品・取引停止にならないなど、双方にとってメリットのある関係を作り上げた。現在では、取引工場は10数社、現地社員も日本人1人を含む9人に拡大。ベトナムでの生産が売上の3割を占めるまでに成長した。

メリットはそれだけではない。国内工場では、設備にあつた加工に特化することで生産効率上がり、国内の売上も利益率も大幅に伸びた。さらに、国内外や現地のメーカーからもベトナムでの金属加工の相談を受けるようになってきた。

「海外では大手企業とも対等に付き合えます。日本では青梅の零細企業と見られますが、ベトナムではインターナショナル企業と見られています」と吉本社長は笑う。

先日、中国企業からベトナムでの加工の相談があり、連絡してきた専務はアメリカ人と、国際色豊かだ。ベトナムの展示会に5年間続けて出展してきたことで、知り合った現地経営者は300人を超える。

「今後はこの人たちとさらなるネットワークを作りたいです。このビジネスモデルはベトナム以外でも応用できます。タイやマレーシアなど周辺諸国にも輪を広げていきたいです」と吉本社長は語る。

多摩の企業が海外で大きく飛躍しようとしている。